



荷基点から車基点に、キリンGロジが新配車システム稼働

適正な運行管理と車両1台あたりの運行密度向上を実現



配車業務の効率化により輸送力・配車能力のキャパシティを拡大

キリングループロジステイクス（本社・東京都中央区、加藤元社長）では先月から、新配車システムを稼働させた。荷物に車両を割り当て

る。荷物を割り当てる「車基点」に変更するとともに、車両、荷物情報を複数の配車担当者が共有化し、最適な車両を手配する。新システムの運用を通じて、適正な運行管理と車両1台あたりの運行密度向上を実現し、協力会社とのパートナーシップを強化。運行生産性の向上、配車業務の効率化によりキリンGロジ全体として輸送力・配車能力のキャパシティが拡大する見通しで、グループ外の貨物を積極的に獲得していきたい考えだ。

●トラックの運行状況から

最適な車両を自動的に手配

キリンGロジではキリングループ貨物をベースカーゴとした全国輸配送ネットワークを構築。約1000台のトラックを常時運行させており、その9割を協力会社が担っている。全国3カ所（東日本支社、西日本支社、九州支社）に配車センターを置き、相互に連携しながら効率的な配車計画を作成している。

新たな配車システム導入の背景にあるのが、物流業界で深刻化するトラックドライバー不足。輸送力を確保するため、協力会社の1日の運行計画の密度を上げ、適正な運収を確保できるような配車が求められていた。また、従来システムの老朽化が進み、配車業務の効率化の観

点からも刷新が必要だった。

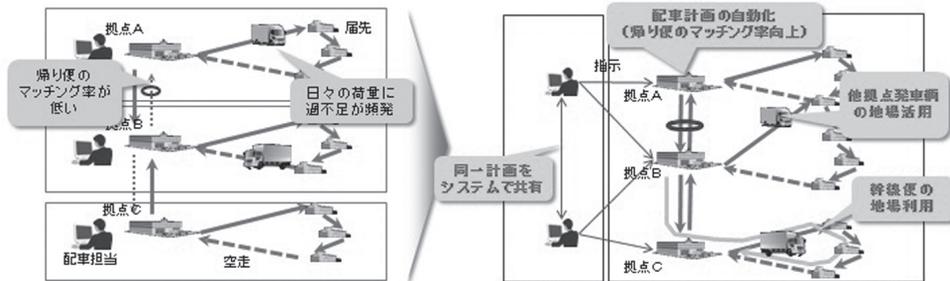
運行の生産性の向上と配車業務の効率化を目的とし、約6億円を投資し新配車システムを導入。約1年の周知および教育訓練期間、実機を用いた約1カ月の試行を経て7月6日から稼働させた。従来手作業で行っていた配車計画を自動化し、トラックの運行状況から最適な車両を自動的に手配することが可能になる。

●みんなの荷物と

みんなの車”を組み合わせる

従来システムでは「Aという荷物をどの車両が運ぶか」についてシステム上で紐付けし、荷物を基点に配車する仕組みだった。新システムは「Bという車両にどの荷物をつけるか」という車両基点の配車の仕組みとなっており、車両の運行状況（稼働・運行時間）から自動的に最適な配車を判別し、適正な運行計画を立てられる。

新システムでは車両、荷物の情報を複数の配車担当者が共有化し、車両、荷物の「担当」の垣根をなくし、みんなの荷物”とみんなの車”を組み合わせる。他の配車担当者が担当する車両の運行状況も確認しながら、自分の担当車両にこだわらず、最適な車



新配車システムのコンセプト

両に荷物を割り当てることができる。

新システム導入を機に、適正な運行計画のもと、運行の密度(総走行距離に対する実車率)を上げること、協力会社の法令遵守と収益向上に貢献し、安定的に輸送力を確保したい考え。効率的な配車計画により、輸送力、配車能力に「余力」が生まれることから、これを外販に振り向けていく。

なお、新システムは若手社員を中心に「HAISSHAくん」と命名。「HAISSHA」は「High Allocation of cars Intelligence Supports an Heir and Accomplishes it」(高度な配車知能が継承者を支援し完遂する)の頭文字から作ったもの。「くん」には自分たちが育てる配車マンの一人という意味を込め、「教育(マスタ整備)することで自分たちの良きパートナーに育てあげる」、「『ハイシャ』という響きになじみがあり、この響きをネーミングに残したい」といった思いを名称に込めた。

従来は配車担当者がその経験値でもって「頭の中で車両と荷物を組み合わせ」配車していたのが、自動的に短時間でできるようになったが、「できあがった配車計画が全体最適になっているかどうかを評価する経験値、ノウハウについては継承していかなければならない」(営業部)としている。

トラック配車台数が4000台超、今夏最大に

パートナー各社との協同で「運びきる」を実現

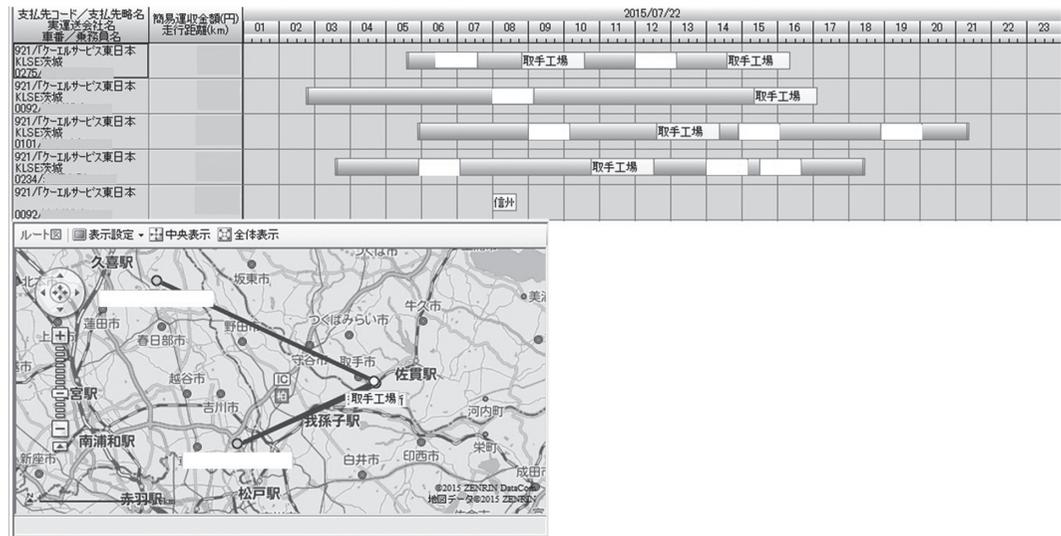
キリンググループプロジェクト

キリンググループプロジェクト(本社・東京都中野区、加藤元社長)では7月22日、配車したトラックの台数が全国で延べ4098台となり、今夏これまでの最多台数となった。同社では「パートナーである運輸会社各社協力のもと、今後も『運びきる』を実現していく」としている。

例年全国的に梅雨明けを迎える7月下旬は、ビール類や清涼飲料水の販売量が急激に増加する時期で、立秋を過ぎた8月15日前後までピーク期間が続く。

ウェブサイト・Eメールよりご意見、情報をお寄せください。

<http://www.cargo-news.co.jp/index.html>
info@cargo-news.co.jp



車両の運行状況から自動的に最適な配車を判別し、適正な運行計画を作成

今年も関東甲信地方や中国・近畿・東海地方が相次いで梅雨明けとなり、「海の日」の連休明けともあいまった7月22日の配送量は、前週までの平均と比べて約400台も増大することとなった。

■ 昨今、集車環境が悪化している中、同社は全国3カ所の配車センターをはじめとした営業部門が社内関係部門と連携を図りながら、事前に配送量予測を基にした集車活動を行うことにより、配送量の増減に対応できる体制を整えている。